

李商隠 「四皓廟」 詩について

著者	大山 岩根
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	11
ページ	106(23)-87(42)
発行年	2006-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/49006

李商隱「四皓廟」詩について

大山 岩根

はじめに

漢の高祖の時代、廢嫡の危機にあつた皇太子を救つた四人の白髪の人、いわゆる「商山の四皓」であるが、彼らの事蹟については『史記』卷五五、留侯世家に見える。その概略を以下に記す(1)。

高祖は皇太子の柔弱さを嫌い、寵愛する戚夫人の生んだ趙王如意を皇太子の地位に据えようとする。これに危惧を抱いた呂后は高祖の謀臣張良に策を求め、張良は高祖がどうしても招く事の出来なかつた四人の隠士を、太子の補佐役として招く。後に宴会の席で、自らが招聘出来なかつた四人の隠士が太子の側に控えているのを見た高祖はついに皇太子を換えるのをあきらめた、というものである。この四人の隠士―東園公・綺里季・用里先生・夏黄公―は、後に「四皓」、すなわち四人の白髪(皓)の老人と称され、以後この呼称が定着していく事となる。また、時代が下り晋の皇甫謐『高士傳』に

おいて四皓は、富や名声を求めず、貧に甘んじて自らの節を貫いた高潔の隠士として描かれている(2)。こうして、『史記』に描かれた、漢朝の創業期にあつて世継ぎ騒動を収めた立役者としての四皓像に、超俗の隠士としてのイメージが付加される。以降唐代に至るまで、詩文において見られる四皓の姿はこうしたイメージに沿うものであり、かつそれは賞賛や憧憬の対象として描かれるのが常であつた(3)。しかし中唐期に至り、四皓に対する真向からの批判を試みた詩篇が表れる。元稹(七七九〜八三一)「四皓廟」詩(4)がそれである。この詩における四皓批判の要点は、平岡武夫氏が詳細に分析する通り、四皓が張良の策に乗つて世に表れたために、隠士としての一貫性を保てなかつた事と、彼らの行為が呂后一族の台頭と劉氏の血統の断絶を招いたという結果との二点に集約される(5)。ここで平岡氏の指摘と最も密接に関わると思われる当該詩の一節、第三十一句目から四十二句目を次に挙げる。

31 漢業日已定 漢業 日びに已に定まり

先生名亦振 先生 名も亦振う

不得爲濟世 濟世を為すを得ざれば

宜哉爲隱淪 宜なるかな 隱淪を為すは

如何一朝起 如何ぞ 一朝起ちて

36 屈作儲貳賓 屈して儲貳の賓と作る

安存孝惠帝 孝惠帝を安存して

摧悴戚夫人 戚夫人を摧悴せしむ

捨大以謀細 大を捨てて以て細を謀り

虬盤而螭伸 虬 盤りて 螭 伸ぶ

41 惠帝竟不嗣 惠帝 竟に嗣がず

呂氏禍有因 呂氏 禍に因有り

元稹は第三十三・三十四句目に見られるごとく、四皓を「濟世を為すを得ざる」役立たずと断じ、大人しく山中に引つ込んでいればいいものを、と痛烈な皮肉を浴びせる。その上で第四十一・四十二句目「惠帝 竟に嗣がず、呂氏 禍に因有り」とあるように、四皓が漢王室の為に一肌脱いだのも結局は漢王室に余計な災難をもたらしただけである、と四皓の行動に対しても厳しい評価を下している。市川桃子氏は、この元稹「四皓廟」詩における四皓批判の背景に、中唐期に表れた古文運動や新樂府運動に見られるような、既成の文学観に対する旺盛な批判精神がある事を指摘している(6)。かつ平岡・市川両氏がすでに取り上げている通り、こうした元稹の観点をほぼ踏襲した詩篇もまた存在する。次に挙げる蔡京(？)(八六三)の「商山の四皓を責む(責商山四皓)」詩(『全唐詩』卷四七二)がそれである。

秦末家家思逐鹿 秦末 家家 逐鹿を思うも

商山四皓獨忘機 商山の四皓 独り機を忘る

如何鬢髮霜相似 如何ぞ 鬢髮 霜 相似たるに

更出深山定是非 更に深山を出でて 是非を定むる

しかし市川氏も指摘するように元稹「四皓廟」詩については元稹の親友である白居易(七七二〜八四六)の「和答詩十首四皓廟に答う(和答詩十首 答四皓廟)」詩で反駁がなされている(7)。白居易の見解は詩の冒頭に「天下 道有らば見れ、道無ければ巻きて之を懷む。此れ乃ち聖人の語、吾れ諸を仲尼に聞けり(天下有道見、無道卷懷之。此乃聖人語、吾聞諸仲尼)」とあるように、天下に道が行われているかどうかを出仕と隱棲の判断基準とする孔子の言葉に基づくものであり、それ故に出仕か隱棲、いずれかの生き方を貫くべしとする元稹の考えに対し、「何ぞ必ずしも長に隱逸せん、何ぞ必ずしも長に時を濟わん(何必長隱逸、何必長濟時)」と反駁するのである。また蔡京詩についても、『雲溪友議』卷中、買山讖の条に「蔡 牧たりて自ずから驕り矜り、詩を作りて以て商山の四老を責めて曰く(蔡牧自驕矜、作詩責商山四老曰)」とあり、蔡京が詩を作り四皓を批判した行為が彼の驕り高ぶった性格の表れとして捉えられていたようでもある(8)。

いずれにせよ、従来は賞賛一辺倒であったといつてよい四皓評価であるが、元稹「四皓廟」詩の出現により全く異なる評価が呈示された事実は看過出来ない。では中唐以降、換言

すれば元稹以後の晩唐の詩人達は四皓をどのように描いていたのであろうか。杜玉儉氏は唐代の文学作品中で描かれる四皓について詳述した論考の中で、「詠史詩中で専ら四皓を対象とするものは十余首あり、四皓廟を訪れて書いた題廟詩は十六首ある（詠史詩中专以四皓为対象的有十多首、经过四皓庙而写的题庙诗有十六首）」と述べているが（9）、晩唐の詩人たちの手になる詩篇は十七首確認出来る。あくまで現存する作品中での話とはいえその比率は高く、晩唐の詩人達の四皓に対する高い関心を窺わせる。李商隱（八二二〜八五八）もまた、「四皓廟」と題する詠史詩を二首遺しているが。本論はこの李商隱「四皓廟」詩について、先行研究への検討を加えた上で、晩唐の諸詩人が四皓を詠じた作品との比較を通してその特徴を考察するものである。この考察を通して、晩唐の詠史詩において詠じられた四皓像についても、その一端を示し得れば、と思う。なお「四皓廟」と題する李商隱詩は二首現存している為、便宜上それぞれを「四皓廟（Ⅰ）」詩（第二冊六五〇頁）、「四皓廟（Ⅱ）」詩（第二冊六二八頁）と呼び、考察を進めていく事とする（10）。

一 「四皓廟（Ⅰ）」詩

羽翼殊勲棄若遺 羽翼の殊勲 棄てらるること遺るるが

若く

皇天有運我無時 皇天 運有りて 我に時無し

廟前便接山門路 廟前便ち接す 山門の路

不長青松長紫芝 青松長ぜずして 紫芝長ず

ここでこの「四皓廟（Ⅰ）」詩の、先行する諸解釈について整理しておきたい。これらの解釈については、現実の政治的な事件を反映した、すなわち政治的な寓意ありとする解釈と、こうした寓意を特には指摘しない解釈の二種に大別出来る。まず政治的寓意ありとする解釈であるが、馮浩は次のように述べる（11）。

此爲輔導莊恪太子者歎也。王德妃已爲楊賢妃譖死、太子危疑之際、竟無人能建羽翼之勲者（中略）詩借古致慨、甚爲警切。

此れ莊恪太子を輔導する者の為に歎ずるなり。王德妃已に楊賢妃の為に譖死せられ、太子危疑の際、竟に人の能く羽翼の勲を建つる者無し（中略）詩 古に借りて慨を致し甚だ警切たり。

莊恪太子とは文宗の皇太子である李永を指す。ここで馮浩が挙げる莊恪太子の一件とは、以下のようなものである。太子永が宴樂や遊興に耽つてしていると聞いた文宗は太子を廢黜しようとするものの、群臣の請願により思いとどまる。しかしまもなく太子は病を得てこの世を去り、しかも文宗の妃である楊賢妃が太子の事をしきりに讒言していた事も明らかとな

り、文宗は激しく後悔する(12)。馮浩はこの「四皓廟(一)」詩が、莊恪太子の補佐役の事を慨嘆した詩である、と解釈するが、それは恐らく詩の本文第一句目「羽翼の殊勲 棄てらるること遺るるが若し」と関わるのであろう。張采田もまた、馮浩とはほぼ同じ解釈を示している(13)。一方、同じく政治的寓意を指摘するものの、馮浩らとは異なる解釈を示すのが、劉学鍔氏である(14)。

馮浩・張采田は四皓が太子を輔佐した事にこだわって、莊恪太子を輔佐した者の為に歎いているのだとする。しかし一句目の「羽翼の殊勲」は極めて重い表現であり、莊恪太子を輔佐しつつも何ら功績を挙げられなかった者に当てはまるものではない(中略)詩の意味を詳細に推し量るに、時事と関わりがあり、この詩と「本為留侯慕赤松(筆者注…「四皓廟(II)」詩の第一句)」とは恐らくどちらも李徳裕の為に発せられたものであろう。「本為留侯」の詩は恐らく李徳裕が蕭何とはなり得ても留侯とはなり得なかった事を歎くものであり、こちらは李徳裕が殊勲を立てながらも終には斥けられた事を歎くものである。

劉氏はこのように、馮浩らの解釈を退けた後、この詩が国家の為に殊勲を挙げつつも左遷の憂き目を見た李徳裕の為に作られた詩であるという自らの解釈を示す。李徳裕はいままでもなく、晩唐期の朝廷における一大党争「牛李の党争」の

中の李党の中心人物であり、文宗の後を継いだ武宗の時代に宰相になるものの、武宗の死後宣宗が即位すると、勢力を盛り返した牛党によって斥けられ、左遷された地で没している。劉氏の解釈もまた、馮浩らの解釈と同様に、一句目「羽翼の殊勲」と深く関わるものであろう。

これに対し、政治的寓意を特に指摘しない立場からの解釈にはどのようなものがあるか。何焯は「松すら猶お封ぜらるるに、羽翼の者願つて遺れらるるや。皆身賤しくして自ら傷み、無聊感憤の詞なり(松猶見封、羽翼者願見遺邪。皆身賤自傷、無聊感憤之詞)」と述べる(15)。ここに見える「松」とは詩の本文四句目の「青松」を指すが、これについては後述する。何焯はやはり一句目に着目するが、松ですら爵位を与えられるのに、羽翼の功績ある人間は却って打ち棄てられるという矛盾を詠じる事で、「身賤しくして自ら傷み」、すなわち李商隱が自らの卑賤の身を歎き、彼自身のいかんともしがたい憤懣(無聊感憤)を述べ表したものである、と解釈する。また、程夢星は次のように解釈する(16)。

史、惠帝既立、不紀四皓有何恩澤、頗疑爲失載耳。如義山此詩則是如介子推不言祿、祿亦不及、聽其還山矣。義山多見僻書、必有所本。故言外有譏其輕出商山之意。

史に、惠帝既に立ち、四皓に何れの恩沢か有るを紀さざるは、頗る疑うらくは失載なるのみ。義山の此の詩の如き

は則ち是れ介子推の禄を言わず、禄も亦及ばずして、其の山に還るを聴きざるが如し。義山多く僻書を見れば、必ず本づく所有らん。故に言外に其の軽がろしく商山を出づるを諷るの意有らん。

程夢星はここで、大功を挙げた四皓に何らかの恩典が与えられたとの記述が『史記』留侯世家に見られない事に疑義を呈する。その上で、介子推が晋の重耳(後の文公)に長年仕え手柄もあつたにも拘らず、その功績を申し出なかつた為に恩賞に与れなかつたものの、文公が帰国し即位出来たのもひとえに天の思し召しであり、それをあたかも己の手柄だといわんばかりに恩賞を求めるなどもつてのほか、といい残し山中へと籠もつた故事を引用する。恐らく程夢星は、李商隱が當時存在した僻書中の記述に基づき、本来であれば介子推の如く身を処するべきであつたのに軽々しく俗世へ出て来て恩典に浴した四皓の行動を諷っている、と解釈しているのではないだろうか。

以上「四皓廟(一)」詩の解釈について、政治的寓意ありとみなすか否かの二つの立場に分類し、それぞれの代表的な解釈を取り上げてみた。いずれの立場にせよ、功績を顧みられなかつた四皓の不遇の姿を描いているという点では大きな異同はなく、要はそこに莊恪太子の補佐役(馮浩・張采田)や李德裕(劉学鍇氏)といった現実政治における挫折者の姿を重ね

合わせるか、そうではなく詩人自らの不遇感の表明とみなす(何焯)か、あるいは四皓の行動を諷った詠史詩であるとする(程夢星)かという点で分岐が生じているのがわかる。先行する諸解釈がそろって指摘するこの四皓の不遇についてであるが、李商隱「四皓廟(一)」詩とは別の形で詠じているのではないか、と考えられる詠史詩がある。同じ晩唐の詩人許渾(七九一?~?)の「重ねて四皓廟を經る二首(重經四皓廟二首)」(17)がそうである。まずはその第一首目を次に挙げる。

峩峩商嶺采芝人 峩峩たる商嶺 芝を采るの人

雪頂霜髯虎豹茵 雪頂 霜髯 虎豹の茵

山酒一壺歌一曲 山酒一壺 歌一曲

漢家天子忌功臣 漢家の天子 功臣を忌む

前半二句は、商山で紫芝を摘みつつ暮らす四皓の様を、雪のように白い頭(雪頂)、霜の降りたような髯(霜髯)、彼らの用いる虎や豹の皮でできたしとね(虎豹茵)等の言葉を用いて表す。続く三句目では、山中で醸した酒を酌み交わしつつ歌う、と一見山中に生きる隱者の理想的な姿を描いているように見える。しかし結句に「漢家の天子 功臣を忌む」とあり、こうした生活が、四皓が漢の天子の為に手柄を立てつつも、天子に忌み嫌われやむなく山中に帰らざるを得なかつたが故の、甚だ不本意なものであつた事が示唆されるようである。とすれば四皓の羽翼の殊勲が打ち棄てられてしまったとうた

う李商隱と、四皓が漢の天子に忌避されてしまったとうたう許渾、この両者の間に発想の共通性を見出す事が出来よう。では引き続き第二首目も取り上げてみたい。

避秦安漢出藍關 秦を避くるも漢を安んぜしめんとして

藍関を出づ

松桂花陰滿舊山 松桂 花陰りて 旧山に満つ

自是無人有歸意 自らはれ 人の帰意有る無く

白雲常在水潺潺 白雲常に在りて 水潺潺たり

秦の世にあつては難を避けていたものの、漢の世になると皇室の跡継ぎ騒ぎを収めるために商山を出た四皓。松や金木犀は盛んに花開き、山一杯に満ち溢れて彼らを見送った。ところが世間に出たは良いものの、四皓は再び商山に帰り隠棲するつもりなどまるでなく、誰もいない山中には白雲と、さらさらと流れる水が以前と変わらずそこにあるだけ。

後半二句、許渾は四皓が一旦俗世に出た途端、隠者である事も忘れそこに留まろうとしたのだと、「白雲」や「水」といった不変の景物と対比する形で四皓の変節をうたう。ここで四皓は、従来喧伝されてきたような節義ある隠者というよりも、世俗の榮譽に味をしめ、なおそれに縋ろうとする俗物であるかのように描かれている。しかしこの四皓の望みもまた、許渾詩にあつては、第一首目の結句「漢家の天子 功臣を忌む」とあるように、天子に忌避される事で脆くも打ち砕

かれる事となる。第一首目と二首目とを合わせ読む事で浮かび上がる、隠者の分をわきまえず俗世に留まる事を望みつつも、よりによつて自らが輔佐した天子に退けられる事で元の木阿弥となつてしまった四皓の姿は滑稽ですらある。ここに許渾が四皓に対して向けたアイロニカルな批判を読み取る事は困難ではないであろう。なお、この許渾「重ねて四皓廟を経る二首」について杜玉儉氏は、第一首目では四皓が隠棲した原因について、高祖が功臣を殺戮した事実に求めているとし、第二首目については富貴を求める四皓の姿を通して、許渾が当時の富貴を追求する人々を諷刺している、と解釈している(18)。この解釈に拠れば、四皓があくまで商山を出ようとし、しない事をうたう一首目と、結局は商山を出てしまふ二集目との間に内容上の齟齬が生じるようにも思われるが、二首目に関して、寓意の有無はともかく四皓を諷刺的に描写しているとの指摘がなされている事は注目に値する。また許渾はこれとは別に、焚書坑儒で落命した儒者を顕彰する為に立てられた廟を詠じた「旌儒廟」と題する詩で、四皓についても言及している。そこでは次のようにうたう。

寒陌陰風萬古悲 寒陌陰風 万古悲し

儒冠相枕死秦時 儒冠 相枕して 秦に死するの時

廟前亦有商山路 廟前亦有 商山の路

不學老翁歌紫芝 学ばず 老翁の紫芝を歌うを

ここでは殉教者というべき儒者達の節義を、山中に逃れ難くを避け安閑として暮らした四皓の行動と対照する形で賞賛している。ここにも許渾の四皓に対する批判的な姿勢が看取されるように思われる。以上許渾「重ねて四皓廟を経る二首」との類似性から考えるに、李商隠「四皓廟（一）」詩の第一・

二句目は、四皓が太子を護り補佐した殊勲は忘れられたかのように打ち棄てられたが、これは元々大いなる天（皇天）にも比すべき偉大なる漢朝に運が味方したからであり、それにひきかえ我らは時の運とて持ち合わせていなかったのだ、と功績を挙げつつも誰からも顧みられなくなった四皓の不遇を、

「我」という一人称を用いてうたうものと解釈出来るように思われる。ここで再度、詩中で詠じられる四皓の不遇に立ち返ると、実は李商隠・許渾よりも先に、四皓の不遇を詠じていると考えられる詩がある。寶常（七四九～八二五）の「商山祠堂即事」詩（『全唐詩』卷二七二）がそれである。

奪嫡心萌事可憂 奪嫡の心萌して 事憂うべし

四賢西笑暫安劉 四賢 西して笑い 暫し劉を安んず

後王不敢論珪組 後王 敢えて珪組を論ぜずして

土偶人前枳樹秋 土偶人前 枳樹の秋

前半二句では四皓の功績が詠じられ、第三句目ではそれに対する恩典が与えられなかった事が詠じられている。しかしこの寶常詩においては、恩典を与えなかった恵帝（後王）に対

して批判的な捉え方をしていると考えられるのに対し、李商隠「四皓廟（一）」詩や許渾「重ねて四皓廟を経る二首」の第一目では、四皓の行動を隠士の道に背くものとして否定的に捉え、その行動の結果としての不遇を皮肉に詠じているようでもあり、そこに四皓に対する意識の変化を見て取る事が出来るように思われる。

ここまでは「四皓廟（一）」詩の第一句目を中心に考察してきた。引き続き当該詩の残りの部分についても考察していきたい。まず第二句目「皇天 運有りて 我に時無し」の「我」字についてであるが、詩中に一人称を用い、あたかも歴史上の人物のモノローグであるかのように表現する手法は、李商隠と同時代の詩人杜牧（八〇三～八五二）の、やはり四皓を詠じた詠史詩「商山の四皓廟に題す一絶（題商山四皓廟一絶）」（19）の承句「我天性において豈に恩讐あらんや」にも見られる。これは父子の情愛（天性）がある以上、決して憎しみ（恩讐）ゆえに太子を廃そうとしたのではない事を、一人称「我」を用い、高祖自身の発言として表すものである。同時代の詩人による、同テーマの詩中において類似する表現がなされている事は留意されてよいであろう。続く第三・四句目では、一転して四皓廟の情景を詠じている。廟の前から山門へと続く道には、青々と茂る松は生えず、ただ四皓が『高士傳』に見えるごとく、「曄曄たる紫芝、以て飢えを療すべし（曄曄

紫芝、可以療飢」とうたい、飢えを癒すべく食した靈草紫芝が生えているだけだ、と。

結句「青松長ぜずして 紫芝長ず」の「青松」についてであるが、紀昀は「青松暗に五松大夫を指す（青松暗指五松大夫）」と述べる（20）。「五松大夫」とは、『史記』秦本紀に見える、始皇帝が泰山にて封禪を行った後嵐に遭い、風雨をしのぐ為に雨宿りをしたので、後に大夫の位に封じられた樹を指すと思われる（21）。紀昀は恐らく「青松」を、大夫の位を得た五本の樹の如き榮達の象徴とみなしているのであろう。また屈復は「松は棟梁たるべくして芝は惟だ隠るべきのみ。

蓋し此の山門を出づれば便ち直ちに京師に至るべし。故に我に時無しと云うなり（松可爲棟梁而芝惟可隠。蓋出此山門便可直至京師。故云我無時也）。と述べ、棟梁すなわち国家に有用な人材のシンボルである松と、隠者のシンボルである紫芝とを対比的に捉え、廟の門を出れば都へと至る道が続いているにもかかわらず世間に出る機会も掴めぬまま山中で不遇をかこつしかない故に「我に時無し」とうたうのだ、と解釈する（22）。「青松」の解釈は紀昀とほぼ同じであろう。また詩の本文二句目「皇天 運有りて 我に時無し」の「我」については、四皓自身を指すと捉えるか、或いは何焯と同じく詩人自身を指すと捉えるかについては明示されていない。しかし前述した通り、杜牧が四皓を詠じた詩中に、歴史上の

人物の一人称として「我」を用いる表現が見られた。かつこの二句目が「皇天」すなわち天にも比すべき皇帝と、「我」とが対比される句中対であり、皇帝に対比されるのが詩人自身であるというのは些か奇妙な感じを拭えない。皇帝に対比されるのにより相応しい人物は詩人ではなく太子の補佐役たる四皓であり、これも第一義的には四皓の一人称として用いられている、とみなす事は出来ないであろうか。また、「青松」を「五松大夫」と解釈する点に関して、李商隠にはこれとは別に「五松大夫」の事を詠じた「五松驛」と題する詩（第二冊六四七頁）がある。

獨下長亭念過秦 独り長亭を下りて 過秦を念う

五松不見見興薪 五松見えぬ 興薪を見る

只應既斬趙高後 只だ応に既に趙高を斬りし後

尋被樵人用斧斤 尋いで樵人の斧斤を用いるを被るべき

のみ

始皇帝によつて大夫の地位に封じられた五本の松も、秦の滅亡と共に樵に切り倒され薪にされてしまった。この詩で「五松」は、権力者の愚昧な行動とそのあつけない結末とを示すものとして描かれている。従つて李商隠詩における「五松大夫」のイメージは、榮達のシンボルとしてのみ単純化する事は出来ないように思われる。無論これを以て「青松Ⅱ五松大夫」とする解釈そのものまで否定するつもりはない。ここで

述べたいのは、この「青松」には松に関わるより普遍的なイメージ、すなわち決して己の節操を曲げる事のない高潔さというイメージが根底にあるのではないか、という事である。仮に「青松」を「五松大夫」を指すものとして捉えるならば、

詩の一句目と呼応して、功績を顧みられず世俗での栄達も果たせなかった四皓の不遇が浮かび上がる。しかしここに、松の持つ不変・高潔といったイメージが重なるとうなるか。

「青松を生ぜず」、廟には松が生い茂らないという表現は、首尾一貫しない行動をとった四皓に対し疑問を投げかけるものとしても解釈出来ないであろうか。かつ同句に見られる地仙の象徴たる靈草「紫芝」は、四皓が俗世にあつて冷遇された挙句、再び商山での隠棲に立ち戻らざるを得なかった事を暗示するものなのかも知れない。四皓への疑問は無論元稹詩に由来しているようが、この結句には元稹のように四皓を非難するのではなく、結局は冷遇される運命にあつた四皓の不遇を皮肉的な筆致で描こうとする詩人の視点が存在しているように思われる。筆者は先に、李商隠「四皓廟（I）」詩と許渾「重ねて四皓廟を経る二首」について、その発想の類似性について指摘した。今詩全体を解釈した上で改めて考えてみるに、李商隠・許渾並びに単に類似する発想を用いているのみならず、四皓の隠者としてのあり方に背く行動に対し、どこか冷やかな視線を投げかけているのではないであろうか。

程夢星が提示した、言外に四皓への非難を含むとする解釈もまたより整合性と説得力を持つものとしてと捉えられよう。

二 「四皓廟（II）」詩

本爲留侯慕赤松 本と留侯の赤松を慕うが為に

漢廷方識紫芝翁 漢廷 方めて識る 紫芝の翁

蕭何只解追韓信 蕭何 只だ解く韓信を追うのみ

豈得虛當第一功 豈に虚しく第一の功に当たるを得んや

留侯（張良）は仙人赤松子を敬慕しており、漢の王室はそのお陰で仙人の如き風格の紫芝の翁（四皓）の存在を知った。それに引き換え宰相蕭何は行方をくらました韓信を追いかけるくらいの能しかないのに、一体どうして漢建国の第一の功労者などといえようか。

一見してわかるように、「四皓廟」と題しつつも、詩中では四皓について詠じているわけではなく、張良と蕭何の優劣を定めているのみである。これが「四皓廟（II）」詩の最も特異な点である。この詩についても先行する解釈について、先ほどと同様に整理しておきたい。まずこの詩について政治的寓意ありとする解釈であるが、徐逢源は次のように述べる（23）。

此詩爲李衛公發。衛公舉石雄、破烏介、平澤路、君臣相得、始終不替。而卒不能早定國儲、使武宗一子不得立、有

愧紫芝翁多矣。故假蕭相識之。

此の詩 李衛公の為に発す。衛公石雄を挙げ、烏介を破り、沢路を平らげ、君臣相得ること、始終替わらず。而るに卒に早に国儲を定むること能わずして、武宗の一子をして立つるを得ざらしむるは、紫芝の翁に愧ずるところ有ること多し。故に蕭相に仮りて之を譏る。

徐逢源の解釈に拠れば、この詩は李衛公、すなわち李德裕の為に作られたものである。李德裕は將軍石雄を登用して異民族を打ち破り、また昭義軍節度使の反乱を鎮圧するなど、武宗の宰相として大いにその信頼を得ていた。しかし武宗の跡継ぎを定めるのには失敗しており、四皓に恥じ入る点もまた多い。故に蕭何に仮託して、果たして第一の功労者といえるであろうかと、李德裕を非難しているのだ、と徐逢源は解釈する。この解釈には自らの箋の中にこの徐逢源の解釈を引用する馮浩も同意する。これに対し張采田は、この「四皓廟(Ⅱ)」詩は李德裕を批判するものではなく、李德裕が蕭何に匹敵する功績を挙げながらもついに張良のように世継ぎを定める事が出来なかったのを惜しんでいるのだ、と解釈する(24)。批判と見るか或いは同情と見るかで分岐はあるものの、いずれも李德裕の事を詠じた詩であると解釈する点では一致している。

一方、政治的寓意を特に指摘しない解釈であるが、姚培

謙は「此れ留侯の定儲の功 最も大なるを美むるなり(此美留侯定儲之功最大也)」と述べ(25)、程夢星もまた、「是れ極めて留侯を賛うるの辞なり(是極贊留侯之辭)」と述べる(26)。両者共に、張良の功績を讃えた詩として解釈するのである。

以上「四皓廟(Ⅱ)」詩について、先行する解釈についてまとめてみた。先に触れた通り、この詩の最も特異な点は、四皓の事蹟について全く触れられていない点である。詩中で四皓は「紫芝翁」という一語で表されているのみであり、後は張良への賛辞とみなしてよい。冒頭二句では張良が仙人赤松子を慕っていたが為に、四皓という隠者を見出し宮廷へと連れ出してきたのだ、とうたう訳であるが、ここでは特に二句目「漢廷 方めて知る 紫芝の翁」で「方」字(そこでやつと、の意)が用いられているのに着目したい。なぜならここで四皓は、天下に名高き高潔の隠士から、張良以外の誰にも知られていない程のマイナーな隠士へと転落しているようにも読み取れるからである。まさしく「張良」あつてこそその「四皓」なのである。かくして、四皓を招聘した張良の姿がクローズアップされる事となり、その分本来の主人公であるはずの四皓の存在が脇に追いやられる事となる。換言するならば詩の中心に据えられるべき四皓の得失を正面から論じるのではなく、彼らに関わる外的な要因(張良)を通して論じている、

という事になろうか。

ではここで、李商隱ほど徹底さは見られないが、この「四皓廟(Ⅱ)」詩と類似する発想を用いていると考えられる詠史詩を、李商隱と同時代の詩人の作例から取り上げる。最初に取り上げるのは温庭筠(八一二?～八七〇?)の「四皓」詩(27)である。

商於用里便成功 商於の用里 便ち功を成す

一寸沈機萬古同 一寸の沈機 萬古同じ

但得戚姬甘定分 但だ戚姫の定分に甘んずるを得なば

不應真有紫芝翁 応に真に紫芝の翁有るべからず

商於(商山一帯の古名)の用里先生(四皓の一人)は手柄を立てたが、そもそも物事には何らかの予兆(沈機)が有るというのは今も昔も同じ事。あの戚夫人が自らの境遇に甘んじてさえいれば、紫芝の翁こと四皓が後世まで名を留める事もありえなかっただろうに。

前半二句では四皓が手柄を立てる何らかの予兆が存在した事をうたう。後半の二句「但だ戚姫の定分に甘んずるを得なば、応に真に紫芝の翁有るべからず」もまた、李商隱「四皓廟(Ⅱ)」詩と同様に、四皓が世に出るきっかけを作った外的要因としての戚姫の姿がクローズアップされており、相対的に四皓の存在感が薄れていると考えられる。張良にせよ戚夫人にせよ、いずれも権力者の気まぐれが四皓の運命を左右し

たのであり、四皓を歴史の立役者として描くの一線を画している点において李・温両者は共通し、そこに四皓軽視の姿勢が看取される。では次に挙げる杜牧の「商山の四皓廟に題す一絶(題商山四皓廟一絶)」はどうであろうか。

呂氏強梁嗣子柔 呂氏は強梁 嗣子は柔

我於天性豈恩讐 我 天性において 豈に恩讐あらんや

南軍不袒左邊袖 南軍 左辺の袖を袒がざれば

四老安劉是滅劉 四老 劉を安んずるは是れ劉を滅ぼす

ならん

呂后とその一族は強暴、皇太子は柔弱。私(高祖)は決して憎しみ故に太子を廃そうとしたのではない。もし南軍が左袖をまくり呂氏打倒を誓っていなければ、四皓が太子を盛り立てた行為も漢王朝を滅ぼす結果を招いていたのだ。

後半二句「南軍 左辺の袖を袒がざれば、四老 劉を安んずるは是れ劉を滅ぼすならん」で、杜牧は四皓の行為が漢王室を滅ぼしかねない危険をはらんだものであったという判断を下す。この点では先に挙げた李商隱や温庭筠の詩との相違が見られるが、杜牧詩における論じ方は正面からは非を下すという単純なものではない。すなわち、南軍に呂氏一族打倒を呼びかけた周勃を引き合いに出し、周勃の漢王室への忠誠心から出た行為と対照する事で四皓の行為の軽率さをあぶり

出しているのである。無論そこには、もし南軍が暫わなければ、と杜牧が詠史詩において最も得意とする反実仮想的な発想(28)が用いられている事も看過出来ない。結果として、後半二句は周勃こそが真の功臣であり、逆に四皓は災いを招いた元凶として貶められているかのような印象さえ読む者に与えているのである。

以上「四皓廟(Ⅱ)」詩と、温庭筠・杜牧の詩とを関連づけて考えるに、四皓本人よりも彼らに関わった張良を前面に押し出すことで、四皓の矮小化して描く事を狙ったのではないかと考えられ、かつそのような発想が当時においてはある程度普遍性を持っていたものではないかと推測されるふしもある。もつとも、この発想のそもその源流は、四皓を巡るエピソードのルーツというべき『史記』留侯世家に見える「竟に太子を易えざるは、留侯 本と此の四人を招くの力なり(竟不易太子者、留侯本招此四人之力也)」という一節であると考えられる。皇太子を廃嫡の危機から救えたのは張良の策の賜物であるというこの『史記』の言葉は、四皓を批判する詩の先駆である元稹「四皓廟」詩の「劉を安んずるの志を懐くと雖も、未だ周と陳とは若かず。皆子房の術に落ち、先生道何屯する(雖懷安劉志、未若周與陳。皆落子房術、先生道何屯)」という一節の典拠でもある。劉氏の天下を安定させる志を懐いていたとはいえ、劉氏の危機を救った周勃

や陳平には及ばないとうたう引用部分の一・二句目「劉を安んずるの志を懐くと雖も 未だ周と陳とは若かず」と、先に挙げた杜牧「商山の四皓廟に題す一絶」とが類似しているのはいうまでもない。このように、『史記』中の文言を、元稹は四皓批判の発想の源流として用いており(29)、元稹より後の世代の李商隱や杜牧などの晩唐の詩人達もまた、そうした元稹のスタンスを踏襲しているのではないだろうか。ただし、隱士として一貫しない四皓の行動への批判を下す元稹に比して、批判よりもむしろ四皓を矮小化し、非難よりも彼らを軽視するかのような姿勢への変化が見られる観は否めない。それは特に、李商隱・温庭筠詩において顕著であろう。このような四皓軽視のスタンスは李商隱達のものに止まらず、彼らよりも時代が下り、唐王朝最末期を生きた詩人唐彦謙(？く八九三？)の詠史詩にも見られる。まずは「漢嗣」詩(『全唐詩』卷六七二)を見てみたい。

漢嗣安危繫數君 漢嗣の安危 數君に繫る

高祖決意勢難分 高祖の決意 勢い 分ち難し

張良口辨周昌吃 張良 口弁にして 周昌は吃

同建儲宮第一功 同に建つ 儲宮 第一の功

漢の皇太子の運命は數人の手の中にあつたが、高祖の決意は計りかねた。巧みな弁舌で四皓を招いた張良、口吃で弁は立たないが皇太子廃立に反対し、呂后に「君微かりせば、太

子幾んど廃せられん(微君、太子幾廢)」と感謝された(『史記』卷九六、張丞相列傳)周昌、共に太子の地位を擁護する上で最大の功績を立てたのだ。

この詩では、皇太子の地位を護った功労者として、張良と周昌の二人を挙げ、四皓については一言も触れられていない。無論これは詩題が「漢嗣」、つまり漢の世継ぎを詠じた詩であり、四皓の事を詠じた詩でない事も関わりがある。では次に挙げる「四老廟」詩(『全唐詩』卷六七二)はどうだろうか。

西漢儲宮定不傾 西漢の儲宮 定まりて傾かず

可能園季勝良平 園季 良平に勝ること能うべけんや

舉朝公將全無策 朝を挙げて公將 全て策無く

借請閑人羽翼成 閑人に請うに借りて羽翼成る

漢王室の皇太子の地位は本来安定して覆る事などなく、そもそも東園公や綺里季をはじめとする四皓が張良や陳平に及ぶはずもない。しかし世継ぎ騒動が起ると朝廷は全くの無策で、結局山中に隠れ棲む暇人に請うてやつと皇太子をお護りする事が出来た。

ここでは単に四皓のみを槍玉に挙げるのではなく、世継ぎ騒動に際し無為無策であった漢朝の人士にも批判の矛先が向けられる。しかし四皓については二句目で張良や陳平に及ばぬとし、四句目では四皓を「閑人」、つまり無能な暇人とま

で断じているのである。「濟世を為すを得ざれば、宜なるかな 隱淪を為すは」とうたう元稹も辛辣であったが、唐彦謙は更に直截的である。四皓に対する輕視の姿勢が、李商隱達のそれよりも一層先鋭化しているのが見て取れよう。「漢嗣」詩で四皓が詠じられていないのも、そうした姿勢の表れであるとも推測しうる。なお、唐彦謙の詩風における李商隱詩の影響について、『唐詩紀事』卷五三、李商隱の条に記事がある(30)。

大年又曰、鄧帥錢若水舉賈誼兩句云、可憐半夜虛前席、不問蒼生問鬼神。錢云、措意如此、後人何以企及。鹿門先生唐彦謙爲詩、纂慕玉溪、得其清峭感愴、蓋其一體也。然警絶之句亦多有。

大年又曰く、鄧帥錢若水 賈誼の兩句を挙げて云う、「可憐むべし 半夜虚しく席を前め、蒼生を問わずして鬼神を問うを」と。錢云う、「措意此くの如くなれば、後人何を以てか及ぶを企せんや。鹿門先生唐彦謙 詩を爲るに、玉溪を纂慕し、其の清峭感愴を得るは、蓋し其の一体なり。然るに警絶の句も亦多く有り」と。

引用文中にある大年とは北宋の楊億の字であり、楊億は北宋初期にあつて李商隱の詩風を模倣し、一世を風靡した西昆体の詩人達の領袖として知られる。また、「賈誼の兩句」は李商隱が賈誼の事を詠じた詠史詩「賈生」詩の後半二句であ

り、「玉溪」とは李商隱の号である。ここでは、楊億が同じく北宋の詩人である錢若水の発言を引用しつつ述べる訳であるが、そこには鹿門先生こと唐彦謙が詩を作る際に李商隱の詩風を慕いこれを受け継がんと努めたので、李商隱の清麗で氣高く、感傷的な情感溢れる詩風（清峭感愴）を受け継いだ、その一方読む者の目を引く奇抜な句（警絶之句）もまた多く継承している、とある。これは李商隱詩の継承に最も熱心であった西崑体の詩人達の目から見ても、唐彦謙の詩に李商隱詩の影響が色濃く認められる事を示している。してみれば、これら唐彦謙が四皓を詠じた詩篇で用いる、四皓輕視の発想の源流を、彼に先立つ李商隱をはじめとする晩唐前期の詩人達の詩篇に求める事が可能ではないだろうか。

おわりに

本論における考察をまとめると、次のようになる。李商隱の「四皓廟」と題する二首の詠史詩においては、功績を顧みられる事もない四皓の不遇の姿をうたったり、四皓自身よりもその外部にいる人物を賞賛する事で、相対的に四皓の功績を矮小化するかのような表現が見られた。しかもそうした表現は李商隱のみに限らず、彼と同時代の許渾や杜牧・温庭筠といった詩人の詩中にも散見する事が確認出来た。更に李商隱詩の影響が指摘される唐彦謙の詩中にもそれは認められ、

四皓輕視とも取れる発想は、晩唐の士大夫の間にある程度共通するものであったのではないかと推測された。無論晩唐期に四皓を詠じた詩篇全てが、こうした四皓への輕視や皮肉をうたっている訳ではない。次に挙げる段成式「商山廟に題す（題商山廟）」詩（『全唐詩』卷五八四）のような作例も存在している。

偶出雲泉謁禮闈 偶たま雲泉を出でて 禮闈に謁す
篇章曾沐漢皇知 篇章 曾て沐す 漢皇の知るに
無謀靜國東歸去 国を靜むるに謀無く 東のかた歸り去

り

羞過商山四老祠 羞ず 商山の四老の祠を過ぎるを
文章の才を以て天子の知遇を得たとはいえ、国家を安んぜしめる策も持ち合わせぬまま故郷へと帰り行く自分と、漢王朝の功績者たる四皓とを引き比べ、自らの拙き官途への嘆きを託した詩篇として読めよう。しかしそれでもこの晩唐期、従来には見られなかった四皓像が詩中に見出されるという点には揺るがず、これを看過する事は不可能であろう。杜玉俛氏は唐代文学において見られる四皓像について論じた一文で、唐代の詩人たちは漢代から魏晉南北朝時代を経て形成されていった四皓像を作品中に吸収し、かつ四皓の故事の真实性については疑問を抱いてはいなかったものの、宋代になると状況が一変し、四皓の存在そのものに対する疑義が呈示される

ようになる、と指摘している(31)。その一例として杜氏は司馬光『資治通鑑考異』の一文を引用するが、その中で司馬光は、もし高祖が本気で趙王如意を立てようとしたならば、もはや四皓如きにどうにか出来る事態ではなく、まして四皓が本当に高祖に皇太子廃嫡を決意させたとするならば、それは張良が皇太子の為に徒党を組みその父である高祖を抑制させた事になり、張良がそのような行為に及ぶはずがない、とする。その上でこの逸話は多分に誇張されて伝えられていたもので到底事実とはみなせず、それを司馬遷が珍しがって採用したに過ぎないのだ、と結論付けている(32)。中唐の元稹「四皓廟」詩で示された四皓批判から、北宋の司馬光による四皓の存在否定へと至る四皓像の変遷の過程に、李商隱をはじめとする晩唐の詩人達による四皓を詠じた詩篇を位置づけることが可能ではないだろうか。また、伊崎孝幸氏は晩唐の詠史詩の特質を論じた論考において、中唐の詠史詩は対象を理知的に判断分析するのに対し、晩唐の詠史詩は対象をいかに斬新な発想やイメージで捉えるかに重点が置かれている、と指摘している(33)。伊崎氏の指摘は、本論で取り上げたところの四皓を詠じた詩篇にもそのまま当てはめて考える事も可能なのである。すなわち、自己の処世観に照らし合わせつつ四皓の功績を詳細に検討し、四皓評価の再構築を目指す元稹に対し、晩唐の諸詩人は四皓の不遇の詠出や、その功績の矮

小化など、元稹とも異なる斬新な発想から四皓を捉え直すようとしている、というように。しかもこうした発想は唐代のみに止まらず、南宋の詩人李綱の「四皓」詩(34)にも継承される。

皓髮龐眉四老翁 皓髮龐眉 四老翁

商山採盡紫芝叢 商山採り尽くす 紫芝の叢

安劉畢竟成何事 劉を安んずるは畢竟 何事をか成せる

空墮留侯巧計中 空しく墮つ 留侯巧計の中

後半二句について、頼玉樹氏は杜牧「四老廟に題す一絶」

詩の「四老 劉を安んずるは是れ劉を滅ぼすならん」の翻案であり、四皓が所詮張良のコマに過ぎず、真の功労者は張良そのものである、と詠じたものであるとする(35)。もとよりそれは杜牧のみに限った事ではなく、本論第二節で述べ来たったように、晩唐の詩人が四皓を詠じた詩篇中にしばしば見られる発想でもあった。また、李綱詩の二句目「商山採り尽くす 紫芝の叢」で、あたかも四皓が糧としてきた靈草紫芝を採り尽くした事で崇高な隱者としての属性を失い、故に碌にありつこうと山から下りて来たかのようにうたわれているのも興味深い。ここでも四皓はその功績を軽視され、どこか滑稽にさえ描かれる存在なのである。

前述した通り李商隱「四皓廟」詩については、現実政治に対する諷刺や慨嘆の表明であるとする解釈も依然として根強

い。それはこの二首の「四皓廟」詩が、それ以前には見られなかつた四皓の不遇を描く、あるいは四皓の事を詩中で全く詠まない等の特異性を有する事にも起因していよう。しかし「四皓廟」詩を同時代の四皓を詠じた詩と同列に置いて比較してみると、特異性よりむしろ晩唐期における、四皓を詠じた詠史詩に共通する普遍性が浮かび上がるように思われる。

「四皓廟」詩を政治批判詩として解釈する立場には、こうした同時代の詩人への配慮が十分になされぬまま李商隱の「四皓廟」詩のみを抽出し、史書の記述と照合させて政治批判詩として解釈しようとする姿勢があるように思われるが、これに筆者は疑問を感じる。故に本論では李商隱「四皓廟」詩について、同時代の詩篇との比較を通して詩中に描かれた四皓像を詳細に検討し、「四皓廟」詩の一解釈を提示した次第である。

注

(1) 上欲廢太子、立戚夫人子趙王如意。大臣多諫爭、未能得堅決者也。呂后恐、不知所爲。人或謂呂后曰、留侯善畫計策、上信用之(中略)留侯曰、此難以口舌爭也。願上有不能致者、天下有四人。四人者年老矣、皆以爲上慢侮人、故逃匿山中、義不爲漢臣。然上高此四人。今公誠能無愛金玉璧帛、令太子爲書、卑辭安車、因使辯士固請、

宜來。來以爲客、時時從入朝、令上見之、則必異而問之。問之、上知此四人賢、則一助也(中略)及燕置酒、太子侍。四人從太子、年皆八十有餘、鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪之、問曰、彼何爲者。四人前對、各言名姓曰、東園公、角里先生、綺里季、夏黃公。上乃大驚曰、吾求公數歲、公辟逃我。今公何自從吾兒游乎。四人皆曰、陛下輕士善罵、臣等義不受辱、故恐而亡匿。竊聞太子爲人仁孝、恭敬愛士、天下莫不延頸欲爲太子死者、故臣等來耳。上曰、煩公幸卒調護太子。テクストは中華書局標点本。以下史書の引用は全て中華書局標点本に拠る。

(2) 四皓者皆河内軹人也。或在汲。一曰東園公、二曰角里先生、三曰綺里季、四曰夏黃公。皆修道潔己、非義不動。秦始皇時、見秦政虐、乃退入藍田山而作歌曰、莫莫高山、深谷逶迤。曄曄紫芝、可以療飢。唐虞世遠、吾將何歸。騶馬高蓋、其憂甚大。富貴之畏人、不如貧賤之肆志。乃共入商洛、隱地肺山、以待天下定。及秦敗、漢高聞之徵之、不至。深自匿終南山、不能屈也。テクストは『太平御覽』(中華書局影印本)卷五〇七、逸民部七所収のものに拠る。

(3) 若干の例を挙げるとすれば、陶淵明「贈羊長史」詩(楊勇『陶淵明集校箋』卷一、正文書局、一九八七年)では「路若經商山、爲我少躊躇。多謝綺與用、精爽今如何」

と、北地へと赴く羊松齡に陶淵明が自らの四皓に対する思慕の情を託しており、また李白「商山四皓」詩（『李太白全集』卷二二、中華書局、一九七七年）では「一行佐明兩、欬起生羽翼。功成身不居、舒卷在胸臆。宵冥合金化。茫昧信難測」と、四皓が皇太子を輔佐する功績を挙げつつも、俗世に留まるを良しとせず再度隠棲したその出処進退の鮮やかさへの賞賛が呈されている。

(4) 巢由昔避世、堯舜不得臣。伊呂雖急病、湯武乃可君。四賢胡爲者、千載名氛氲。顯晦有遺跡、前後疑不倫。秦政虐天下、黷武窮生民。諸侯戰必死、壯士眉亦顰。張良韓孺子、椎碎屬車輪。遂令英雄意、日夜思報秦。先生相將去、不復嬰世塵。雲卷在孤岫、龍潛爲小鱗。秦王轉無道、諫者鼎鑊親、茅焦脫衣諫、先生無一言。趙高殺二世、先生如不聞。劉項取天下、先生游白雲。海內八年戰、先生全一身。漢業日已定、先生名亦振。不得爲濟世、宜哉爲隱淪。如何一朝起、屈作儲貳賓。安存孝惠帝、摧悴戚夫人。捨大以謀細、虬盤而螭伸。惠帝竟不嗣、呂氏禍有因。雖懷安劉志、未若周與陳。皆落子房術、先生道何屯。出處貴明白、故吾今有云（『元稹集』卷一、中華書局、一九八二年）。なお元稹以前にもすでに四皓に対する批判的もしくは懷疑的な観点の存在を示す資料が、僅かながら見出される。『晋書』卷八四、殷仲堪伝に、四皓の

行動が隱士の保身のあり方に符合しないのではないかと考えた桓玄が、殷仲堪に書状を送りその是非を尋ねたとの記事がある。桓玄の書状は現存していないが、同書に載せる殷仲堪の返書中にその一部が引用されている。

そこには「又謂諸呂強盛、幾危劉氏、如意若立、必無此患」との一節があり、桓玄が呂氏の專横を抑制する為に趙王如意を太子に立てるべきであつたと考え、故に四皓の功績についても否定的な捉え方をしていた事が推測される。また、盛唐から中唐にかけての詩人張志和の「漁父」詩（『全唐詩』卷三〇八）に「翻嫌四皓曾多事、出爲儲皇定是非」とあり、四皓が皇太子の爲に一肌脱いだのは何とも余計な事、と否定的な見解が示されている。

(5) 平岡武夫『白居易』（中国詩文選一七、筑摩書房、一九七七年）二四三～二四四頁参照。

(6) 市川桃子「元稹「四皓廟」」六〇～六一頁参照。伊藤漱平編『中国の古典文学 作品選読』（東京大学出版会、一九八一年）所収。

(7) 天下有道見、無道卷懷之。此乃聖人語、吾聞諸仲尼。矯矯四先生、同稟希世資。隨時有顯晦、秉道無磷緇。秦皇肆暴虐、二世遭亂離。先生相隨去、商嶺采紫芝。君看秦獄中、戮辱者李斯。劉項爭天下、謀臣競悅隨。先生如鸞鶴、去入冥冥飛。君看齊鼎中、焦爛者酈其。子房得沛

公、自謂相遇遲。八難掉舌樞、三略役心機。辛苦十數年、晝夜形神疲。竟雜霸者道、徒稱帝者師。子房爾則能、此非吾所宜。漢高之季年、嬖寵鍾所私。冢嫡欲發奪、骨肉相憂疑。豈無子房口、口舌無所施。亦有陳平心、心計將何為。幡幡四先生、高冠危映眉。從容下南山、顧盼入東閭。前瞻惠太子、左右生羽儀。却顧戚夫人、楚舞無光輝。

心不畫一計、口不吐一詞。暗定天下本、遂安劉氏危。子房吾則能、此非爾所知。先生道既光、太子禮甚卑。安車留不住、功成棄如遺。如彼旱天雲、一雨百穀滋。澤則在天下、雲復歸希夷。勿高巢與由。勿尚呂與伊。巢由往不返、伊呂去不歸。豈如四先生、出處兩逶迤。何必長隱逸、何必長濟時。由來聖人道、無昧不可窺。卷之不盈握、舒之亙八陲。先生道甚明、夫子猶或非。願子辨其惑、爲予吟此詩（朱金城『白居易集箋校』卷一。上海古籍出版社、一九八八年）。

(8) 『雲溪友議』のテキストは四部叢刊本に拠る。

(9) 杜玉儉「唐代文学中的商山四皓題材」一六三頁。『唐代文学研究』第十一輯所収。広西師範大学出版社、二〇〇六年。なお晩唐の詩作品中の四皓を詠じた詩の検索には、台湾・故宮博物院のテキストデータベース「寒泉」を使用した。

(10) 引用した李商隱詩のテキストは劉学鍇・余恕誠『李商

隱詩歌集解』（中華書局、二〇〇四年増訂重排本）を用い、詩題の後ろに冊数と頁を示した。また本論で引用した『全唐詩』所収詩のテキストは全て中華書局標点本に拠る。

なお本文中で挙げた詩人の生卒年について、李商隱の生卒年は張采田『玉溪生年譜會箋』（上海古籍出版社、一九八三年）の説に従い、それ以外の詩人の生卒年は基本的に周祖譔主編『中国文学大辞典 唐五代卷』（中華書局、一九九二年）に拠った。ただし竇常と杜牧の生卒年については植木久行氏による最新の研究成果に拠る。植木久行『詩人たちの生と死 唐詩人伝叢考』（研文出版、二〇〇五年）参照。

(11) 馮浩『玉溪生詩集箋注』卷一。上海古籍出版社、一九九八年。

(12) 莊恪太子永、文宗長子也。母曰王德妃：開成三年、上以皇太子宴遊敗度、不可教導、將議廢黜：其年薨：時傳云、太子、德妃之出也。晚年寵衰。賢妃楊氏、恩渥方深、懼太子他日不利於己、故日加誣譖、太子終不能自辯明也。太子既薨、上意追悔（『舊唐書』卷一七五、文宗二子傳）。テキストは中華書局標点本。

(13) 唐自敬宗以後、多以旁支入繼大統。文宗莊恪太子又以譏廢、此詩之所以借古發慨也。語最深婉（張采田『玉溪生詩辯正』。『玉溪生年譜會箋』所収）。

(14) 馮、張泥於四皓為太子羽翼事，謂為輔導莊恪太子者歟。

然首句「羽翼殊勳」用筆極重，殊非輔導莊恪太子並無顯著功績者所能當（中略）細推詩意，聯繫時事，此詩與「本為留侯慕赤松」蓋同為李德裕而發。第「本為留侯」篇蓋慨其能為蕭何而不能為留侯，此則慨其雖建殊勳而終遭斥棄耳（劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』第二冊六五二頁）。

(15) 朱鶴齡箋注、沈厚棗輯評『李義山詩集』卷中。臺灣學生書局、一九六七年。

(16) 朱鶴齡箋注・程夢星刪補『李義山詩集箋注』卷中。廣文書局、一九七二年。

(17) 『丁卯集』（四部叢刊本）卷上。

(18) 他又有《重經四皓廟二首》，其一謂（中略）从刘邦杀戮功臣来解释四皓隐居的原因，这是发前人所未发，其二謂（中略）这是对四皓结局的一种说法，认为他们也贪恋富贵，开始不出山，出山之后却不想回去了，这实际是以四皓来讽刺当时贪恋富贵之人。注9所揭的杜玉儉氏論文一七五～一七六頁。

(19) 馮集梧『樊川詩集注』（上海古籍出版社、一九六二年）卷四。

(20) 注15に同じ。

(21) 二十八年：乃遂上泰山立石、封、祠祀。下、風雨暴至、

求於樹下。因封其樹為五大夫。テクストは中華書局標点本。

(22) 屈復『玉溪生詩說』卷七。正大印書館、一九七四年。

(23) 注11に同じ。

(24) 非譏衛公、蓋惜其能為蕭何而不能為留侯也。留侯身退、薦賢以扶社稷、衛公恃功自固、所賞拔者武人而已。卒為僉王旅進、身亦不保、欲求一紫芝翁而不可得矣。豈徒為建儲一事致慨哉（張采田『玉溪生年譜會箋』卷三）。

(25) 姚培謙箋『李義山詩集箋注』卷一六。中文出版社、一九七九年。

(26) 注16に同じ。

(27) 曾益注・顧予咸補注・顧嗣立重校『溫飛卿詩集箋注』（上海古籍出版社、一九九三年）卷五。

(28) この点については山内春夫『杜牧の研究』（彙文堂書店、一九八五年）所収の「杜牧の詠史詩について」に詳しい。

(29) こうした発想を用いた詩句として、管見の限りで初出と思われるのは盛唐の張説「崔公に贈る（贈崔公）」詩（『張説之文集』卷七、四部叢刊本）の「卒能匡惠帝、豈不頼留侯」句である。

(30) テクストは中華書局点校本。

(31) 四皓故事出現在汉代，唐人在学习汉代典籍，以其中的

人物作为自己表达思想的手段时，并不是完全按照汉人的说法，而是吸收了魏晋南北朝人对汉代记述的改造。所谓四皓的紫芝歌，最早出现在晋人皇甫谧的记载中，是模仿《史记·伯夷列传》中的《采薇歌》的，真实性值得怀疑，但唐人都以之为真，以致“紫芝客”成了四皓的代称。唐人对汉人的记述一般深信不疑，唐人不怀疑四皓故事的真实性。宋代就不同了，司马光在《资治通鉴考异》中说（以下略）。注9所揭の杜氏論文一八七頁。

(32) 按，高祖剛猛伉厲、非畏撻紳譏議者也。但以大臣皆不肯從、恐身後趙王不能獨立、故不爲耳。若決意欲廢太子立如意、不顧義理、以留侯之久故親信、猶云非口舌所能爭。豈山林四叟片言遽能扼其事哉。借使四叟實能扼其事、不過汚高祖數寸之刃耳。何至悲歌云、羽翮已成、增繳安施乎。若四叟實能制高祖、使不敢廢太子、是留侯爲子立黨、以制其父也。留侯豈爲此哉。此特辯士欲夸大四叟之事、故云然（中略）凡此之類、皆非事實。司馬遷好奇多、愛而采之。今皆不取（司馬光『資治通鑑考異』卷一）。テキストは四部叢刊本。

(33) 伊崎孝幸「晚唐の詠史詩」六六～六七頁。『中國文學報』第六十九冊所收、二〇〇五年。

(34) 『李綱全集』（岳麓書社、二〇〇四年）卷一二。原文は横組み簡体字。

(35) 賴玉樹『晚唐五代詠史詩之美學意識』結論「晚唐五代詠史詩美學價值與地位」二五三頁參照。秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇五年